井原１号墳

福岡県前原市大字井原字京龍所在前方後円墳の調査概要

前原市文化財調査報告書

第83集

付　高祖東谷１号墳

２００３

前原市教育委員会

井原１号墳

福岡県前原市大字井原字京龍所在前方後円墳の調査概要

前原市文化財調査報告書

第83集

付　高祖東谷１号墳

２００３

前原市教育委員会

序

前方後円墳は、わが国特有の古代首長墓であり、わが国の国家成立過程を明らかにする上で不可欠の歴史遺産と言われています。福岡県内にはおよそ２５０基の前方後円墳が知られていますが、糸島地方にはそのうち60基ほどが集中して分布しており、旧郡域を一つの単位としてその分布密度を比較してみると全国でも屈指の前方後円墳の密集地帯です。

糸島地方の古墳の重要性については、これまでに発掘調査が行なわれた一貴山銚子塚古墳、丸隈山古墳、今宿大塚古墳、鋤崎古墳、曽根古墳群、釜塚古墳が国史跡に指定されていることからも窺い知ることができます。

井原１号墳では近年、古墳周囲の開墾が進んだことに起因して墳丘裾の崩壊が進み、墳丘の将来的な保護が危惧されたため、平成13年度、14年度に国県の補助を受けて、墳丘ならびに主体部の緊急確認調査を実施いたしました。

短期間の調査でありましたがその結果、多くの新知見をえることができ、今後の古墳保護，整備を図るための基本資料として大いに活用できるものと考えます。

本書が、当地の古墳時代研究の資料として、また、文化財保護活動の一助となれば幸いです。

平成15年３月31日

前原市教育委員会
教育長　菊竹　利嗣

例　言

1．本書は平成13年度、14年度に、国，県の補助を受け発掘調査を実施した井原１号墳の発掘調査報告書である。本書には同市高祖字東谷1656-1番地他に所在する高祖東谷１号墳の発掘調査成果も掲載している。

2．本書に掲載した遺構の実測図作成、写真撮影について、井原１号墳は　江野道和（1、２次）岡部裕俊　江崎靖隆（1次）が作成し、高祖東谷１号墳では川村博、石井扶美子（現夜須町教育委員会）が行なった。製図は、岡部が行なった。

3．本書に使用した遺物実測図のうち，土器は岡部が、鉄器は岡部と島影弥生が実測し，製図、写真撮影は岡部が行なった。

　井原１号墳から出土した鉄器の防錆処置は比佐陽一郎氏、片多雅樹氏（福岡市埋蔵文化財センター）の指導を受け、牟田華代子、岡部が行なった。

　また、同遺物のＸ線透過写真撮影、実体顕微鏡写真撮影は比佐陽一郎氏、片多雅樹氏（福岡市埋蔵文化財センター）にお願いした。

4．作成した遺物、実測図，写真等の資料については整理が完了次第、伊都歴史資料館で収蔵保管の予定である。

5．本書の執筆、編集は岡部が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに
1．調査にいたる経過 …… 1
2．調査の組織 …… 2
Ⅱ．調査の記録
1．位置と環境 …… 3
2．調査の成果 …… 3
（1）調査区の設定 …… 3
（2）墳　丘 …… 6
1トレンチ　2トレンチ　3トレンチ　4トレンチ　5トレンチ　6トレンチ …… 6
墳丘出土土器 …… 14
（3）主体部 …… 15
7トレンチ　箱式石棺　副葬品の出土状況　鉄器群A　鉄器群B …… 15
（4）その他の遺構、遺物 …… 20
Ⅲ．ま と め …… 21
付　高祖東谷1号墳 …… 23
Ⅰ．はじめに …… 23
（1）調査にいたる経過 …… 23
（2）調査の組織 …… 23
Ⅱ．調査の記録 …… 23
1．位置と環境 …… 23
2．調査区の設定 …… 27
3．墳　丘 …… 27
1トレンチ　2トレンチ　3トレンチ　4トレンチ　5トレンチ …… 27
4．主体部 …… 30
刳抜形木棺 …… 30
箱形石棺 …… 32
攪乱坑出土鉄器 …… 32
5．その他の遺構 …… 33
土　坑 …… 33
Ⅲ．ま と め …… 34

図 版 目 次

図版１　ａ．井原１号墳全景（真上から）
　　ｂ．１次調査１，２トレンチ全景（東から）
図版２　ａ．１トレンチ（南壁　北から）
　　ｂ．２トレンチ（東から）
　　ｃ．３トレンチ（北から）
図版３　ａ．４トレンチ（南から）
　　ｂ．５トレンチ（北から）
　　ｃ．６トレンチ（西から）
図版４　ａ．後円部箱式石棺（南から）
　　ｂ．同　　上（東から）
　　ｃ．箱式石棺外鉄器群Ａ出土状況（北から）
図版５　ａ．サブトレンチａ箱式石棺東掘り方土層断面（北から）
　　ｂ．箱式石棺外鉄器群Ｂ出土状況（西から）
　　ｃ．同　上　近景（西から）
図版６　ａ．箱式石棺棺材（北から）
　　ｂ．箱式石棺外出土鉄器①
図版７　ａ．箱式石棺外出土鉄器②、墳丘出土土師器
図版８　ａ．高祖東谷１号墳調査前現況
　　ｂ．１トレンチ
図版９　ａ．２トレンチ
　　ｂ．３トレンチ
図版10　ａ．後円部主体部検出状況
　　ｂ．同　上
　　ｃ．同　上
図版11　ａ．舟形木棺検出状況
　　ｂ．舟形木棺内部清掃後
　　ｃ．箱式石棺検出状況
　　ｄ．箱式石棺内部清掃後
図版12　ａ．後円部土坑完掘状況
　　ｂ．出土鉄刀、鉄剣、不明鉄器

挿　図　目　次

第１図　井原1号墳、高祖東田に1号墳の位置と周辺の主要前方後円墳（1／5,000）…… 3
第２図　井原1号墳周辺地形（１／5,000）…… 5
第３図　井原1号墳現況図（1／500、昭和61年　時）…… 6
第４図　井原1号墳現況図（平成14年6月現在）…… 7
第５図　井原1号墳調査区配置図（１／200）…… 8
第６図　1トレンチ実測図（１／30）…… 9
第７図　2トレンチ実測図（１／30）…… 10
第８図　3、4トレンチ実測図（１／30）…… 11
第９図　5トレンチ実測図（１／30）…… 12
第10図　6トレンチ実測図（１／30）…… 13
第11図　2トレンチ出土土器実測図（１／3）…… 14
第12図　後円部箱式石棺図（１／20）…… 15
第13図　石棺材実測図（１／20）…… 16
第14図　棺外副葬鉄器出土状況実測図（１／２）…… 17
第15図　鉄器群Ａ出土鉄器実測図（１／２）…… 19
第16図　鉄器群Ｂ出土鉄器実測図（１／２）…… 20
第17図　井原１号墳復元図（１／400）…… 21
第18図　後円部箱式石棺復元図（１／50）…… 22
第19図　箱式石棺イメージ図 …… 22
第20図　高祖東谷１号墳周辺の地形（１／2,500）…… 24
第21図　高祖東谷１号墳現況図（１／300）…… 25
第22図　高祖東谷１号墳調査区配置図（１／300）…… 26
第23図　１～４トレンチ位置図（１／80）…… 28
第24図　５トレンチ遺構配置と断面図（１／40）…… 29
第25図　舟形木棺実測図（1/20）…… 30
第26図　箱式石棺、土坑実測図（１／20）…… 31
第27図　攪乱坑出土鉄器実測図（１／２，１／４）…… 33
第28図　高祖東谷１号墳墳形推定図（１／300）…… 34

Ⅰ．はじめに

１．調査にいたる経過

井原１号墳は福岡県前原市大字井原字京龍541番地に所在する前方後円墳である。

昭和47年に作成された前原町文化財地図（原田大六監修）には大型箱式石棺を主体部とする前方後円墳として紹介されている。

墳丘は終戦直後まで近隣の松井集落の共同墓地として利用された。墓地利用の開始時期は明らかではないが墓石の中には　　年の銘を残すものもある。墓の大半が改葬された現在も墳丘のいたるところに墓石等が残されている。現在は墳丘を含む丘陵を市の公共用地（墓地）として管理している。

昭和61年度には井原地区県営ほ場整備事業に伴い、古墳の保存について議論された。古墳一帯は昭和56年度から進められた井原地区県営ほ場整備事業施工区域の一角を占めていたが、古墳の立地する台地と周囲の水田面に顕著な比高差ができ、用地の管理が難しくなることから、古墳保存の是非について農林サイドと協議が行なわれた。その結果、墳丘全長が40mを超える古式の前方後円墳で、文化財としての重要性が高いと判断されたことから、一転して現地での保存が決定された。

同年度中には、市教育委員会が同志社大学、奈良大学の学生諸君の協力を得て墳丘の現況測量を実施した。これによって全長が４２mほどの前方後円墳であることがはじめて確認された。現況図でみる限り、クビレ部から前方端部にかけて撥型に開き、古式の様相を呈しており、怡土平野における最古期の前方後円墳である可能性も論議された。

井原１号墳　後円部の近況

その後、市教育委員会では墳丘裾に説明板を設置し古墳の周知化にとりくむとともに、定期的に墳丘の除草作業を実施し、管理を行っている。

しかしその一方、古墳墳丘周囲は崖状を呈し、裾部はかなり崩落している現状も明確化し、古墳の保護を図る上で将来に対する不安も指摘された。

ほ場整備後は周辺の水田ほ場との比高差が顕在化したことも手伝って、古墳裾部の崩壊が進行し、とりわけ、平成４年に北部九州一帯を襲った台風17号の豪雨により、前方部東裾の崩落が進み、崩壊した土砂の一部は下段にある水田に達し、その対応について地権者と協議することとなった。

市教育委員会は、古墳の現状を市の文化財保護委員会に報告し、早急に墳丘形態、規模確認のための発掘調査を行ない、将来の抜本的保護に向けて資料化を図るよう指導を受けた。

そこで平成13、14年度にかけて国県補助事業として発掘調査を実施することとした。

第１次調査は平成14年３月19日～31日。第２次調査は同年４月20日～６月１日である。

2．調査の組織

井原１号墳の調査にかかる組織は以下のとおりである。

調査主体　前原市教育委員会

総　括	前原市教育委員会教育長	三嶋　利彦	（～平成13年６月　日）
		菊竹　利嗣	（平成13年６月　日～）
	教育部長	上田　勇介	
	文化課長	松井　　昇	（平成13年度）
		小池　史哲	（平成14年度）
	参　事	小池　史哲	（平成13年度）
	同　課長補佐	中村　鉄弥	（平成14年度）
	同　文化財係長	林　　覚	
調査担当	同　文化財係主査	岡部　裕俊	（第２次　発掘調査･遺物整理）
	同　主　事	江野　道和	（第１、２次　発掘調査）
	同　主　事	江崎　靖隆	（第２次　発掘調査）
	主　事	牟田華代子	（遺物整理）
庶　務	同　文化振興係主事	浜地　　克	
	同　歴史資料館係主事	福山　二葉	

発掘作業、遺物整理

柏田睦子、藤森啓子、和多治子、米山八重子、市丸千賀子、井上狭衣、山崎チヨ子、青木輝代、平山富士子、原野スミ、内川スミエ、島影弥生、友池真由美、山崎賀代子、川上辰子、末松真奈美、柴田由美子、櫛崎尚子

なお、発掘調査および報告書作成にあたって、下記の方々からご指導，ご助言を賜った。また、地元行政区にもご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

西谷正（九州大学）、小西龍三郎（九州造形短期大学）、伊藤実（広島県立歴史民俗資料館）、山口譲治、加藤良彦、常松幹夫、比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）、橋口達也、伊崎俊之、佐々木隆彦（福岡県教育委員会）、柳田康雄（九州歴史資料館）、吉村靖徳（福岡教育事務所）、久住猛雄（福岡市教育委員会）、渡辺正気、松崎（井原行政区長）、松隈、笠

Ⅱ．調査の記録

１．位置と環境（第１，２図）

井原1号墳は伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡から南へ約1.5ｋｍ、怡土平野を貫流する瑞梅寺川水系の赤碕川左岸丘陵上に位置する。古墳の周囲は長年にわたる水田開削等が行なわれた結果、あたかも独立丘陵上に立地しているが、本来は南から派生した舌状丘陵の先端部に位置していたものと推定される。

糸島地方ではこれまで計60基の前方後円墳が発見されており、北部九州屈指の密集度を誇る。当該地方は龍頭状地形を呈し玄界灘に突き出た旧志摩郡域と、内陸部の旧怡土郡域に大別され、旧怡土郡域で49基、志摩郡域で11基が前方後円墳が確認されている。数の上では古墳時代における怡土郡域の政治的優位性をうかがい知ることができる。

怡土郡域の前方後円墳はさらに今宿～周船寺域、怡土平野、長野川～深江域の小グループに分かれ、それぞれ前期から後期にいたるまで継続的に前方後円墳の造営が行なわれているのが特徴である。井原１号墳、高祖東谷1号墳はともに怡土平野グループに含まれる。

怡土平野を囲む丘陵、山腹には多くの古墳が立地し、伊都国以後の糸島地方の動静を知る上で重要な情報を内抱している。

三雲・井原遺跡では弥生時代集落の中心部近くに古墳時代になると墳丘全長78mの端山古墳、全長72m以上と推定される築山古墳など、当地を代表する古式の大型古墳が築造される。また、曽根丘陵上には三雲古墳群に後続する曽根古墳群（狐塚、銚瓶塚、ワレ塚古墳、先山古墳）が引き続き築造される。

井原１号墳の周囲に目をやると、赤崎、分田川の東岸丘陵上には西堂古賀崎古墳が立地する。単龍環頭装飾付大刀をはじめとする武器、金銅装馬具、装飾付須恵器などの豊富な副葬品が出土し、６世紀中葉の築造と推定される。

また、１号墳の南西200mには井原２号墳があった。残念ながら墳丘は調査されることなく破壊され、その規模や形態、時期等の具体的情報がないのは惜しまれる。瑞梅寺川に面した山稜上には正恵古墳群も立地する。

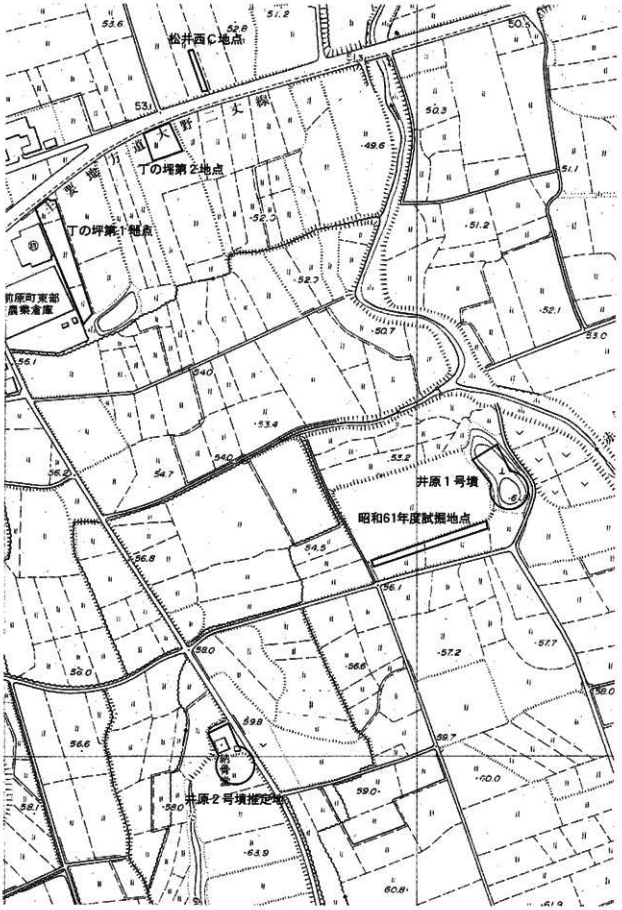
井原1号墳の南部丘陵上には、大正期までは「つかばる（塚原）」という小字が残っていた。昭和63年にその一角から井原作出古墳が発見、調査された。５世紀初頭の築造と推定される。

南側の山腹には１号墳（前方後円墳）を盟主とする井原トリノス古墳群も分布する。６～７世紀に築造されたものと推定される。

ところで、井原１号墳の地には、浅い谷を隔てて井原遺跡群が広がる。三雲・井原遺跡は弥生～古墳時代前期を中心として栄えた伊都国期の拠点集落であるが、古墳時代中期以後、集落は次第に南へとその中心が移動しており、後期以後はその中心は井原遺跡群に移行している。井原丁ノ坪遺跡では６世紀後半代の竪穴住居、堀立柱建物が調査されていることもそれを裏づける。集落が南部へと移動した要因はいかなるものであったのか、伊都国消長の謎を解く上で興味深い事象である。

1．井原１号墳　2．高祖東谷１号墳　3．泊大塚古墳　4．御道具山古墳　5．潤神社古墳
6．砂魚塚１号墳　7．立石１号墳　8．東真方Ｃ－１号墳　9．東真方Ａ－１号墳　10．東二塚古墳
11．奥の院古墳　12．林崎古墳　13～17．日明古墳群　18．有田塞ノ本１号墳
19．香力天神前１号墳　20．香力天神前２号墳　21．屋敷１号墳　22．先山古墳　23．ワレ塚古墳
24．銭瓶塚古墳　25．茶臼山古墳　26．端山古墳　27．築山古墳　28．井原２号墳
29．西堂古賀崎古墳　30．井原トリノス１号墳　31．王丸浦ノ田Ｂ－１号墳　32．向上４号墳
33．山犬ノ尾Ｃ－１号墳　34．飯氏Ｂ－14号墳　35．飯氏鏡原古墳　36．飯氏二塚古墳
37．兜塚古墳　38．丸隈山古墳　39．山ノ鼻２号墳　40．山ノ鼻１号墳　41．若八幡宮古墳
42．今宿大塚古墳　43．谷上古墳　44．高上大塚古墳

第１図　井原１号墳、高祖東谷１号墳と糸島地方の主要前方後円墳（1／50,000）



第2図　井原1号墳周辺地形（1／2,500）

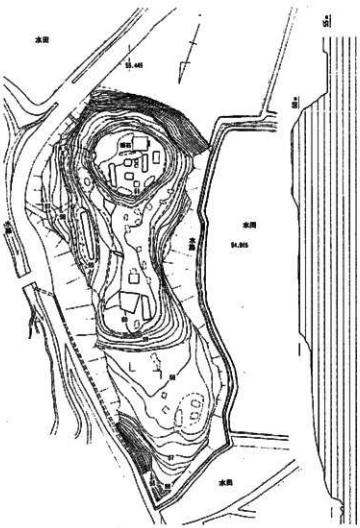
2．調査の成果

（1）調査区の設定（第3～5図、図版1）

昭和61年に測量調査（第3図）を行なった際に墳丘の遺存状況の概要は把握することができた。すなわち、前方部前面を除く墳丘周囲が大きくが削り取られ、墳丘裾部で現況をとどめているのは前方部前面と後円部東南裾のみであった。墳丘裾部においては後円部の東部から南にかけて幅1.5mのテラスが確認され、後円部は2段築成以上であることが確認された。しかし、西クビレ部の裾は既に崩落し、東クビレ部では墓か営まれていたことなどからクビレ部から前方部にかけて墳丘形態の確定が難しい状況であった。

そこで、東クビレ部から後円部にかけて、および前方部前面を中心に墳丘裾の確認を行い、墳形、規模の把握に努めるとともに、段築の有無、葺石等外部施設を確認をすることを目的として調査を開始した。調査にあたっては古墳の保存を最優先し、調査範囲は必要最小限にとどめるためトレンチの幅は1mとし、状況に応じて最低限の拡張を行なうこととした。

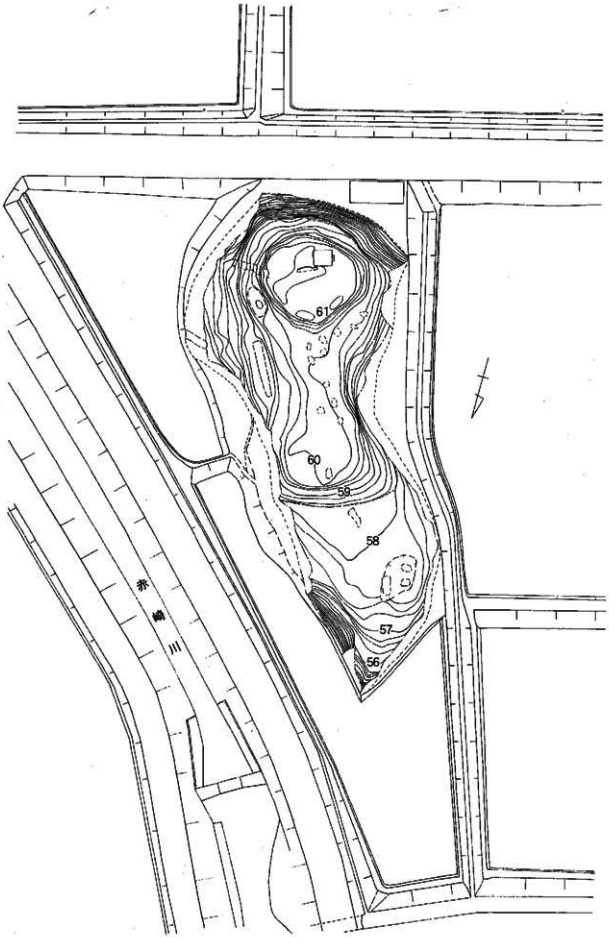
平成13年度の第1次調査では後円部に2本（1，2トレンチ）、前方部に2本（5，6トレンチ）、翌年度の第2次調査では補足調査として前方部（3トレンチ）、後円部（4トレンチ）に各1本のトレンチを設定した。また、5トレンチについては第1次調査の成果を受けて、墳裾の延長方向を確認するため、東側に1m拡張した。



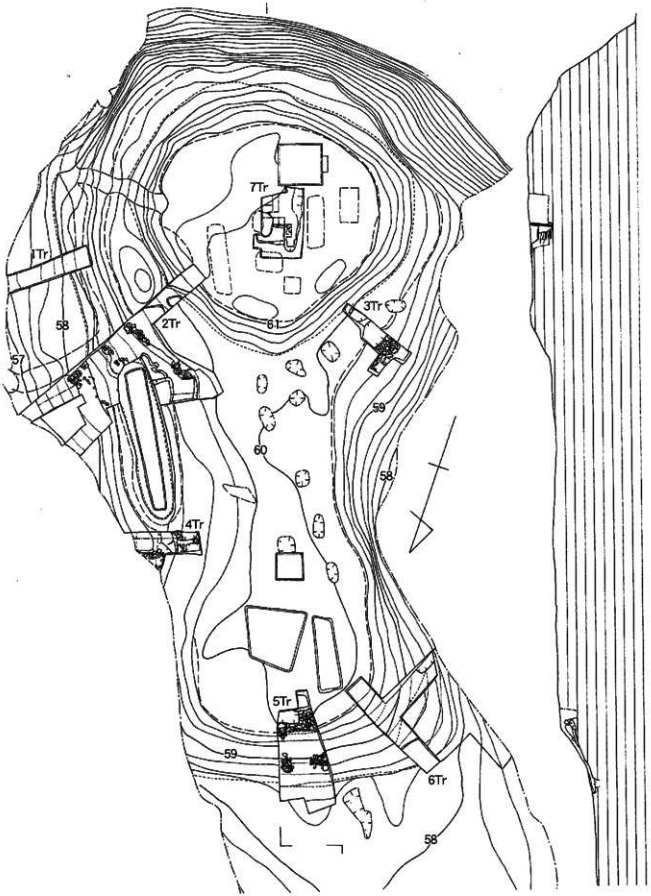
第3図　井原1号墳現況図（1/500、昭和61年当時）

調査の結果、墳丘斜面は長年にわたって営まれた墓地の掘削等により、見た目以上に墳丘各部の改変が進んでいることがわかった。しかし、前方部が　2段、後円部が3段築成であることが確認されるとともに、2・3・5トレンチでは葺石の遺存を確認することができ、墳丘形態の復元に貴重な情報をえることができた。

なお、第1次調査中に後円部中央付近から大型の箱式石棺が出土したという地元からの情報を得たことから、石棺出土地点を特定するため正方形のトレンチ（7トレンチ）を設定して調査を行なった。トレンチ中央から大破した箱式石棺を検出できた。



第４図　井原１号墳現況図（1/500、平成14年６月現在）



第５図　井原１号墳調査区配置図（1/200）

(2) 墳 丘

以下、各トレンチの概要を報告する。

1トレンチ（第6図，図版2 a）

後円部の東裾、墳丘の段築状況を確認するため、幅1m、長さ4.5mのトレンチを設定した。表土下から地山である赤色ロームを検出し、標高57.75mのコンターライン付近から緩やかに墳丘に向かって傾斜しており、ここが墳丘裾部にあたるものと推定される。しかし、葺石等は確認できず、墳丘基底部の位置を特定できなかった。

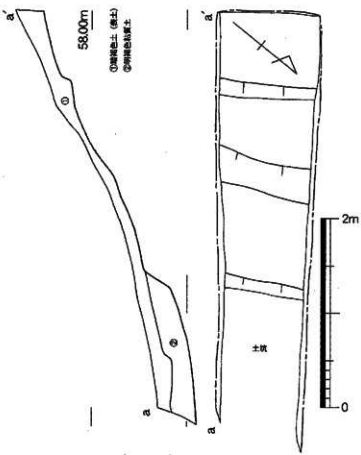
また、裾部で土坑1基を検出した。遺物等の出土はなかったが、縄文期の遺構の可能性がある。

2トレンチ（第7図，図版2 b）

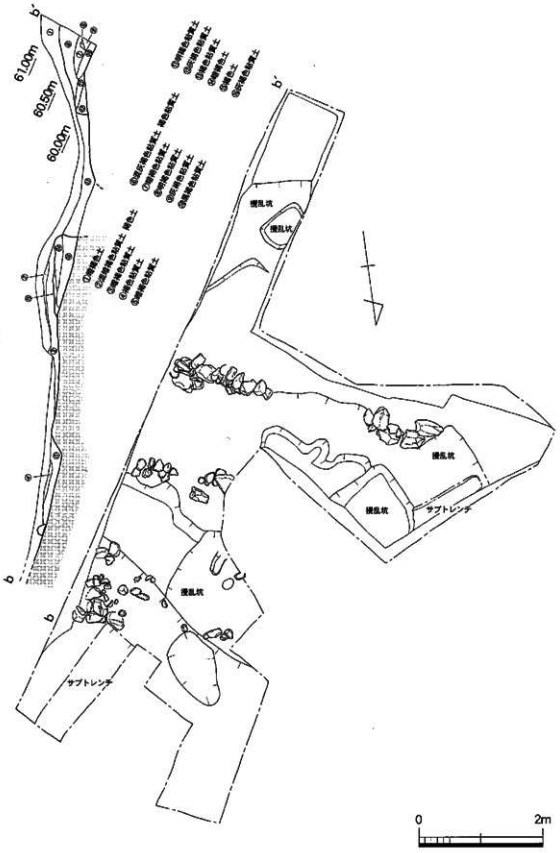
墳裾、クビレ部の位置、後円部と前方部の結合状態の確認を目的として設定したトレンチである。後円部中央から想定主軸に対し約45°の角度で後円斜面から墳裾に向かって幅1mのトレンチを設定した。トレンチ裾付近には表土下で川原石の集積が認められた。転落した葺石が2次的に集積されたものであろうか。標高　mのコンターラインに墳丘の立ち上がりとみられる段が確認された。しかし、20cmほどで整地されたような緩斜面へと移っている。後世に開削されたものとみられる。標高58.25m付近で小ぶりの川原石の集中が認められた。この礫群はきっちりと組まれたものではなく、上面から崩落して堆積した状況を示しているが、横方向にほぼ同じレベルで堆積していたことから崩落した1段目の葺石と推定された。標高59m地点では人頭大の川原石が高さ40cmほどに積みあげられた状態で葺石が確認された。腰石は抜かれていて、小ぶりな川原石が粗く積み上げられていた。葺石の裏面では整形されたフラットな地山の上面で赤色土と褐色土の互層が確認され、墳丘盛土の遺存が確認された。

1段目の葺石は遺存状況が悪く、またクビレ部上には墓があることから延長方向の確認は断念し、2段目の葺石列を追ってトレンチをクビレ部に向かって拡張した。しかし、拡張区範囲の大半は度重なる墓の掘り方、改葬土坑によって著しく攪乱され、わずかに腰石とみられる人頭大の塊石を検出したが、元位置を保っているものではない。しかし、この塊石群から北に向かって傾斜変換線が向きを変えていることから、この位置が墳丘2段目のクビレ部の屈曲点と推定された。

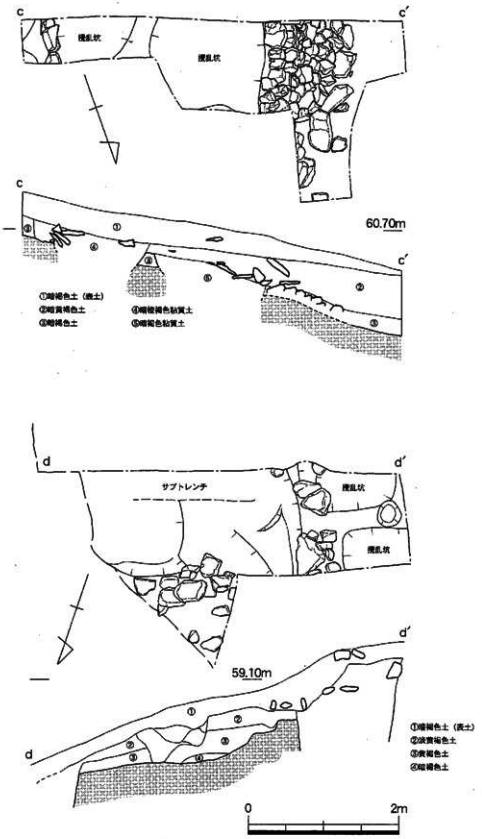
2段目の葺石付近の埋土から土師器甕、高杯片2点、丸底鉢片が出土した。



第6図　1トレンチ平面・土層断面図（1/40）



第７図　２レンチ平面・土層断面図（1/60）



第８図　３、４トレンチ平面・土層断面図（1/40）

3トレンチ（第8図，図版2ｃ）

後円部墳丘の2、3段目の墳丘整形状況を確認するために設定した長さ4m、幅1mのトレンチである。2段目の葺石が良好な状態で出土した。腰石基底部の標高は59.7mで高さ40cm、幅100cmに積み上げられていた。

葺石は基底部に長めの川原石を据え、斜め上方に密に石を積み上げる。葺石の積み上げ傾斜角度は水平に対し約23°で、勾配は緩やかである。

基底面に2段目のテラス面は2基の墓穴によって撹乱されていたが、トレンチの東隅で崩落した川原石の堆積が確認され、この位置が概ね後円部3段目の立ち上がり部と判断された。

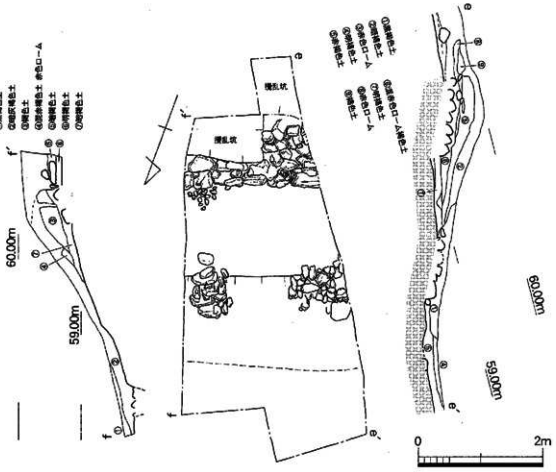
4トレンチ（第8図，図版3ａ）

前方部東部の形態を確認するために設定した長さ3.8m、幅1mトレンチである。トレンチの東端は崖面に到達した。

トレンチ内は墓穴等による撹乱が著しく、出土した葺石はいずれも元一を保っていなかった。しかし、トレンチ中央部では南北に横断する傾斜変換線が認められ、この上面に比較的大きな

川原石が集積していることから、この位置が墳丘2段目の立ち上がりと推定された。

トレンチ東端で壁際から川原石が多く露出していたので、三角形状に一部拡張して石の出土状態を確認したが、意図的に配された状態ではなかった。



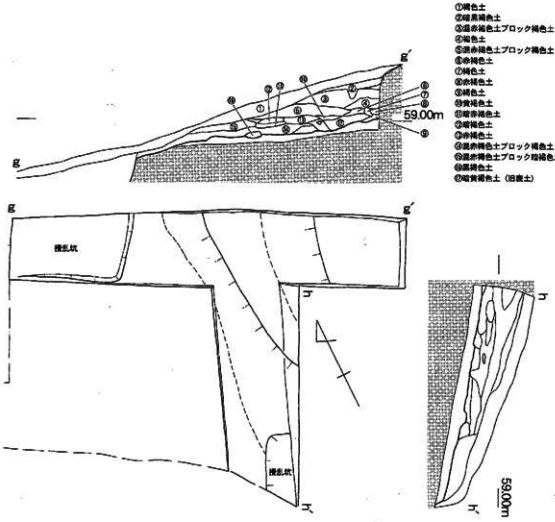
第9図　5トレンチ平面・土層断面図（1/60）

5トレンチ（第9図，図版3b）

前方部前面の墳丘の築成状況、墳丘裾の確定等を目的として設定したトレンチである。斜面は2段に成形され各段斜面には葺石が施設されていた。墳頂部は墓穴によって大きく攪乱を受けており詳細は不明であるが、現況地形を考慮するとくびれ部から前方端部に向けて緩やかに上り勾配であったとみられる。墳丘の断ち割りは行なわなかったが、墓穴1の掘り方内の壁面観察では、墳丘上面までほぼ地山の削り出しにより成形されていることが分かった。

1段目の葺石は墳裾と推定される傾斜変換線からやや上方に上がった斜面の中ほどから高さ40cm、幅70cmほど積まれていた。腰石には幅広の平石を据え、斜面上方に向かって小石を積み上げていた。石積みは粗いためか葺石の崩落が2段目より顕著である。

これに対し2段目は高さ40cm、幅80cmに積まれ、柱状の塊石を横長に据えて腰石とし、1段目と比較して大ぶりの石を丁寧に積み上げている。1段目、2段目の葺石とも勾配は °ほどで、3トレンチの葺石と同様かなり緩やかに積み上げている。ここでは今回の調査で唯一段築のテラス面が良好に確認できた。標高59mほどで、幅1.0mほどを計る。テラスの南東隅角では腰石下の地山直上で小礫群がまとまって出土した。礫群の広がりは確認できなかったが、テラス面を追おう化粧礫である可能性があり注目される。



第10図　6トレンチ平面・土層断面図（1/60）

6トレンチ（第10図，図版３ｃ）

前方部北西コーナーの遺存状況を確認するためにＬ字状に設定したトレンチである。ここでもトレンチの北端では墓穴の攪乱により裾部が破壊されており、また、葺石や、明確な段築の遺存は確認できなかった。コーナーであったために遺構の自然崩壊が進んだ者と推定される。

墳丘の遺存状況を確認するために、墳丘の大刀割を実施したところ、墳丘の大半が盛土ニヨル成形であることが分かった。基底面には旧表土とみられる明黄褐色～茶褐色土層があり、その上方に赤褐色土、黒褐色土、黄褐色土が半築されていた。版築の単位は粗く、墳丘裾に向かって下り勾配で積み上げられていた。南北壁では中途でわずかに傾斜がきつくなった箇所が２点確認され（標高　m、　m）、５トレンチの段築のここが段築のレベルとほぼ等しいことから、段築の名残りをとどめているものかもしれない。

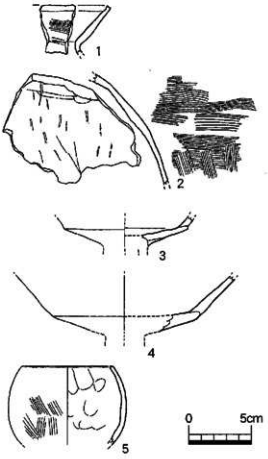
墳丘出土土器（第11図，図版７）

２トレンチの墳丘３段目テラス面を中心に土器片が10点ほど出土した。いずれも細片である。

１、２は甕である。口縁部と胴部片で接合はしないものの同一個体と推定される。口唇部はコの字状を呈し、内側は若干上向きにつまみあげる。口縁は上外方に直線的に伸びる。口縁部から胴部への屈曲は顕著である。口縁部外面はヨコナデ、内面には横ハケが施される。胴部外面は縦ハケの後、肩部に仕上げの横ハケを施し、内面は縦方向のケズリが行なわれる。胎土には角閃石、石英、長石小粒を含み、色は黄褐色。焼成は良好である。

３、４は高杯である。いずれも直線的に上外方に伸びる。３は脚柱部との接合痕が明瞭で杯部の立ち上がりには明瞭な段を有す４はやや大型である。いずれも色は赤褐色。胎土には雲母片を多く含む細かい粘土を使用し、焼成は良好である。

５は丸底鉢である。胴部は球形で、後円部は内湾し、端部はコの字状に納める。外面には縦ハケ、内面はナデで仕上げる。胎土には長石粒が多く含まれ、色は白灰褐色を呈する。焼成は良好である。



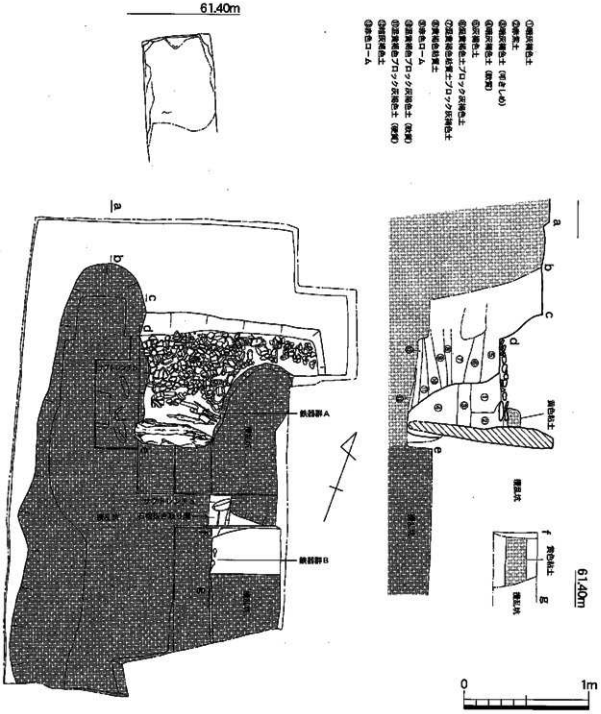
第11図　２トレンチ出土土器実測図（1/3）

（3）主体部

7トレンチ（図版4，第12図）

後円部中央に設定した7トレンチから箱形石棺を検出した。

石棺の発見は戦後まもなく近隣の松隈家によって墓が築かれた際に地下に埋め込まれた大きな2枚の板石を掘り出したことによる。いずれも地下に深く埋め込んであったとのことで側板であったとみられ、蓋石の有無、また棺内の詳細については記憶が定かでないとのことであった。



第12図　7トレンチ平面・土層断面図（1/60）

石棺とその周囲では墓がいくつもの墓穴が重ねて掘り返されており、石棺と掘り方の大部分もこれにより破壊されていた。墓壙の掘り方も大きく破壊されており、わずかに石棺の北小口からは墓壙の北東コーナー付近が原況を留めていただけである。石棺が墓孔の中央に組まれたとすれば、墓壙の東西幅は２～2.2m前後の長方形プランと推定される。

南小口部付近は近接する墓石下にあったため、詳細は明らかできなかった。

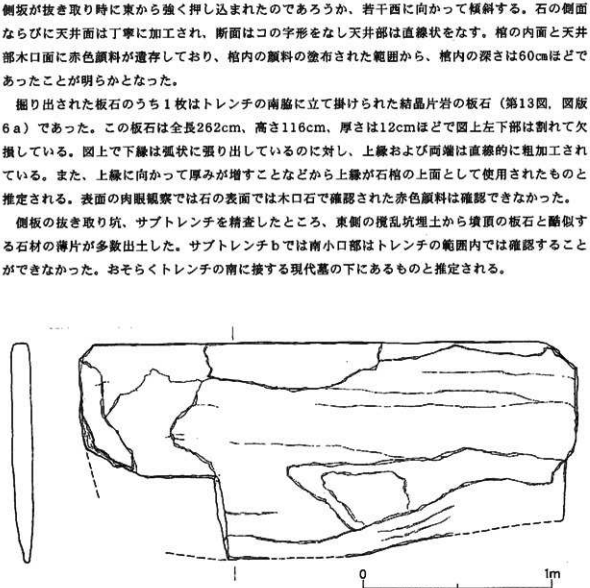
ちなみに、石棺北小口付近で墓穴の壁面の土層観察を行なったところ、石棺の掘り方の最深部にあたる　mから上方では盛土により成形されていたことが判明した。１トレンチの墳丘の土層観察結果も合わせて考慮すると、後円部３段目の奮起有はほぼ盛土によって成形されていたこが分かった。また、石棺は後円部の墳丘盛土層を切って掘り込まれていることも確認された。

箱形石棺（第12図、図版４ａ，ｂ）

箱式石棺は側板、小口石とも１枚板を使用していたとのことである。唯一旧状を保つ北小口石も側板が抜き取り時に東から強く押し込まれたのであろうか、若干西に向かって傾斜する。石の側面ならびに天井面は丁寧に加工され、断面はコの字形をなし天井部は直線状をなす。棺の内面と天井部木口面に赤色顔料が遺存しており、棺内の顔料の塗布された範囲から、棺内の深さは60cmほどであったことが明らかとなった。

掘り出された板石のうち１枚はトレンチの南脇に立て掛けられた結晶片岩の板石（第13図，図版６ａ）であった。この板石は全長262cm、高さ116cm、厚さは12cmほどで図上左下部は割れて欠損している。図上で下縁は弧状に張り出しているのに対し、上縁および両端は直線的に粗加工されている。また、上縁に向かって厚みが増すことなどから上縁が石棺の上面として使用されたものと推定される。表面の肉眼観察では石の表面では木口石で確認された赤色顔料は確認できなかった。

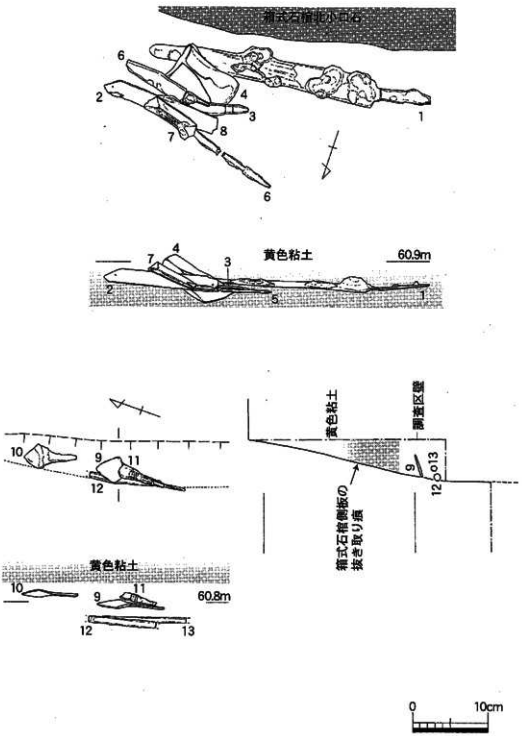
側板の抜き取り坑、サブトレンチを精査したところ、東側の攪乱坑埋土から墳頂の板石と酷似する石材の薄片が多数出土した。サブトレンチｂでは南小口部はトレンチの範囲内では確認することができなかった。おそらくトレンチの南に接する現代墓の下にあるものと推定される。



第13図　後円部頂上に遺存する棺材実測図（1/20）

鉄器群Ａ（第12図、図版４ｃ）

上述のように石棺内は大破していたが、鉄器群が棺外北小口の東部に偏った位置で礫床上から出土した。これを鉄器群Ａと呼ぶ。内訳は剣1、袋状鉄斧１、鏃１、錐１、錐状鉄器１、穂摘具２である。



第14図　箱式石棺副葬鉄器出土状況図（1/5）

剣は礫床に接した状態で、他の鉄器は鉄剣からやや遊離した状態でその上面から出土した。鋸と穂摘具の表面には絹布と推定される布痕が付着していた。絹布の付着が工具類に限られること、工具類は鉄剣とやや遊離して出土し、あたかもなだれ落ちたように出土したことから、工具類だけが副葬時には絹布に包まれていた可能性がある。

鉄器群A出土遺物

剣（第15図1，図版6）完形で、刃部、柄の表面には木質が錆着しており、鞘入り状態で副葬されたものである。剣身の中央部でやや折れ曲がっている。全長37.8cm、剣身長30.2cm、茎部長7.6cmを測り、刃部は断面が菱形の両刃で、茎部は断面長方形を呈する。柄には目釘孔が2孔穿たれている。

柄下には長さ　cmにわたって骨片が錆着しており、鹿角が刃部を5mm覆うように装着されていたものと推定される。

鋸（第15図2，図版6）鋸は全長15.6cm、幅2.8cm、厚さ1mm。薄板の両側縁に二等三角形状の歯がつくりだされるが刃の形状は見た目不ぞろいである。先端が丸みを帯びているのは使用痕跡であろうか。刃にはアサリやナゲシなどの仕様は認められない。鋸の両端に直径2mmほどの円孔があり、両端に柄が取り付けられたものと推定されるが、表面に木質の付着は認められないことから装着方法は不明である。

斧（第15図3，図版7）鍛造袋状鉄斧で、全長9.0cmの、刃部巾4.2cm、袋基部巾3.9cm、重量　gを測る。袋部は鉄板の両端を折り曲げて作り出しており、接合は不完全である。刃部のつくりは厚い。

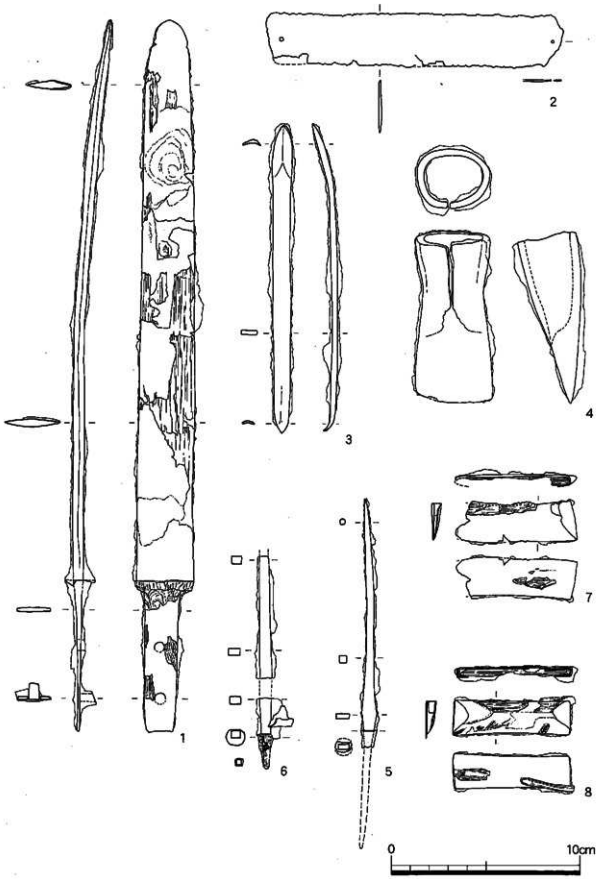
鉋（第15図4，図版7）全長　16.2cm、幅1.1cm、厚さ4cmを測る小型の鉋である。両端に刃が研ぎだされており、図上上部は先端付近が心持ち幅広に打ち出され、先端に向かって直線的に反り、下端は先端付近のみ、大きく反る。細工、仕上げ用と推定される。

錐（第15図5，図版7）完形であったが、現場において、雨後の清掃時誤って茎部を紛失してしまった。

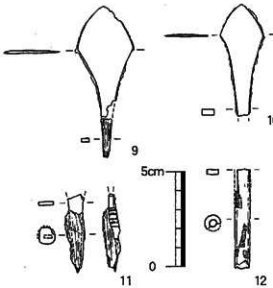
復元全長18.6cm、刀部長11.4cm、刃の基部で幅8mm、厚さ3mm、茎部長7.2cmを計る。刃部は断面正方形であるが、先端近くは角が取れ丸みを帯びている。使用痕跡と考えられる。刃基部から茎部2かけては断面長方形を呈す。茎部には柄の木質が付着、遺存している。

不明鉄器（第15図6，図版7）先端部と刃部中ほどが欠質しており、刃基部に穂摘み鎌7が錆着している。刃部断面は長方形で幅6mm、厚さ4mmほど、茎部は長さ1.8cmと短い。器種は不明であるが、錐、鑿等が候補となる。

穂摘鎌（第15図7，8，図版7）2点出土している。いずれも鉄板の両端を曲げて木柄に装着する。7は残存長6.4cm、幅2.0cm、厚さ6mmを測る。8は全長6.2cm、幅1.8cm、厚さ6mm刃部裏面に絹布が付着しており、絹布に包まれていたものと推定される。



第15図　鉄器群Ａ出土鉄器実測図（1/2）



第16図　鉄器群Ｂ出土鉄器実測図（1/2）

鉄器群Ｂ（第12図、図版５ｂ，ｃ）

東側板に、幅30cmほど残っていた石棺の掘り方の表面に石棺の圧痕が残っていた。当初は圧痕は原状のまま保存して埋め戻す予定であったが、表面に鉄器の一部が露出したので、壁土を少し取り除いたところ、礫床から若干浮き上がった状態で鉄鏃が出土した。副葬品を保護するため追加調査を行なった。鉄鏃の出土は総数５点である。そのうち４点を図示する。

鉄鏃は刃部が残るもの（9、10）と茎、矢柄だけが残るもの（11、12）があり、これらは石棺材の抜き取り時に破損したもので、本来は矢柄に装着した状態で石棺脇に副葬され、さらに黄色粘土で被覆していたものと推定される。

鉄器群Ｂ出土遺物

鉄鏃（図版７，第16図）９～12は鉄鏃である。9、10も圭頭鏃で平面形は鋒長が長く、菱形に近い。最大幅下から内側に湾曲しながらすぼまり茎部にいたる。９は茎部に一部破損が認められるものの、ほぼ旧形を把握できる。全長8.1cm、幅2.9cm、厚さ1.5mmを計る。茎部には矢柄の木質がわずかに残る。10は茎部を欠失している。残存長5.9cm、幅2.2cm、厚さ1.5cmを測る。11、12は茎部のみで、矢柄が錆着している。茎部には樹皮を巻き、その上から矢柄を挟みさらに外側から糸を巻き固定する。

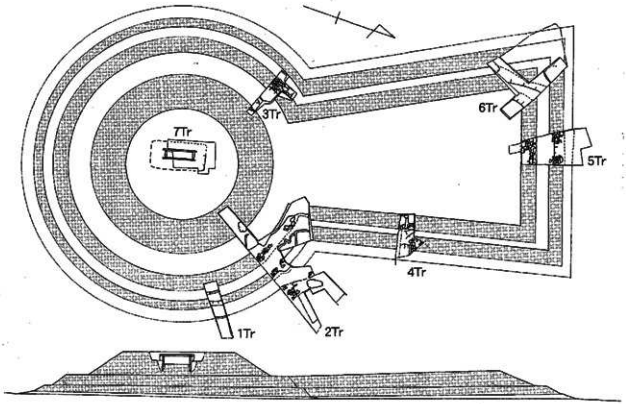
（4）その他の遺構、遺物（第17図）

２トレンチの北西隅から不整形土坑を検出した。埋土からは縄文中期の土器片が数点出土している。また、墳丘表土から石鏃が１点出土した。一帯に当該期の集落が展開していたことをうかがわせる。

Ⅲ．まとめ

墳丘　調査の結果、井原１号墳は前方部２段、後円部３段築成の前方後円墳があることが確認された。墳丘の規模、形態等の復元を試みた。

まず、情報量が多かった後円部２段目に着目し、２トレンチのクビレ部から東にかけて、また、３トレンチの葺石基底部の位置を基準に後円部を真円形と仮定して２段目裾のラインを復元した。さらに１段目の墳丘裾については１、２トレンチから推定された墳丘裾部を基準とした。２段目のテラス幅は前方部のテラス幅を援用し約１mとした。３段目のテラス幅は３トレンチの成果を用いた。前方部については２トレンチクビレ部から４トレンチで推定した２段目の立ち上がりをもとに前方端部に直線的に伸びるものと仮定し、３トレンチから６トレンチにかけて葺石の遺存状況から墳形

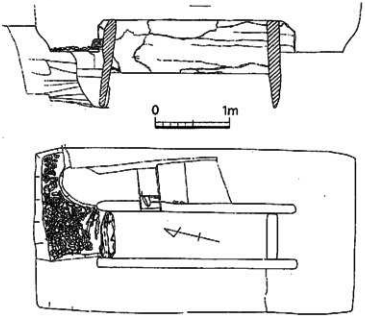


第17図　井原１号墳墳丘復元図（1/300、アミかけ部は葺石範囲）

を復元すると、第17図のようになる。主軸は概ねN19°W方向に向ける。全長は43m、後円径25m、推定高3.6mほど、クビレ部の幅14.5m、前方部の長さ20m、端部幅20m、推定高2mを測る。現状では前方部右端部のほうが左側に比べてやや大きいと推定される。墳丘１、２段目斜面の勾配は23°と緩やかであるが、後円部三段目の斜面は一転して35°と急勾配となる。

主体部　後円部中央で大型箱式石棺を１基検出した。遺存する側板から推定される主軸長は2.5m前後、棺の内法は北小口付近で巾40cm、深さ60cmほどとなる。棺材は１枚板で側板が小口板を挟み込むものと推定される。（第18図、19図）

他の埋葬施設の有無については今後の調査の進展を待ちたい。



第18図　後円部箱式石棺構造復元図（1/50）

棺の内外に礫床を設け、棺内の床面が棺外の床より10cmほど低く設けられる。攪乱から出土した棺床の礫にはベンガラと推定される赤色顔料が厚く付着していたものがみられ、棺床に敷かれたものとみられることから、棺床にも礫を敷き、さらにベンガラを敷きつめていたものと推定される。（第19図）

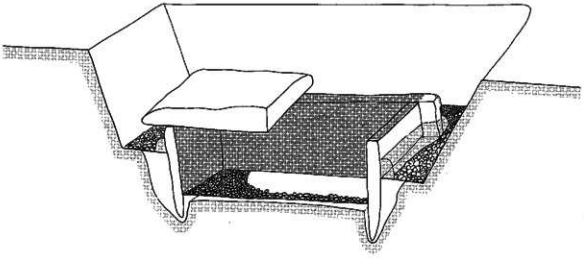
副葬品の出土状態　北小口で出土した鉄器群のうち鉄剣は礫の真上に置かれ、石棺に寄せて副葬されていた。しかし他の工具類は副葬位置が若干北寄りに離れぎみで、かつ副葬方向も一様に鉄剣から若干ずれている。また、工具のうち鋸、穂摘み具の表面には絹布が付着していたことから、これら工具は絹布に包み込まれて副葬されていた可能性が高い。鉄剣と工具類とは副葬の性格が若干異なるものとみられる。

一方、東棺外では棺に密着した状態で矢柄を装着した鉄鏃が副葬されていた。近隣の一貫山銚子塚古墳でも石室の天井壁付近に鉄剣、鉄槍などの武器が副葬されており、関連が注目される。避邪を目的として棺外に武器を配したのであろうか。

棺外北小口にまとまって付近に副葬された工具について、北部九州では鋸、錐などの多種工具が一括副葬が確認された例は少ない。同時期の古墳としては管見では福岡市の老司古墳など数例にとどまる。

古墳の築造時期　墳丘から出土した土器は細片ばかりであるが、甕は口唇部がコの字に成形され、胴部はやや長胴気味と推定される。高杯は杯部の立ち上がりの稜が顕在化している。近隣の正恵6号墳の周溝供獻土器に若干後出するものとみられ、柳田編年のⅡC期、久住編年のⅡB期に比定されよう。怡土平野グループの前方後円墳のなかでの時間的な位置としては端山古墳と築山古墳の中間期に位置付けられる。また、政治的な位置付けとしては、今後の検討課題としておきたい。

今後の課題　これまで、井原1号墳の被葬者像については怡土平野における初現期の古墳と位置付け、政治的には三雲・井原遺跡の大首長に従属するグループのプレーン的小首長と位置付けてきたが、今回の調査結果によってこれに若干の修正を加えるとなった。今回の成果を今後の古墳の保存、活用に生かしていきたい。



第19図　後円部箱式石棺イメージ図

付編　高祖東谷１号墳

Ⅰ．はじめに

１．調査にいたる経過

高祖東谷１号墳は前原市大字高祖字東谷1656-1、1658番地に所在する前方後円墳である。

昭和58年度に地権者から1658番地について農地改良のため土取りする旨、教育委員会に連絡があった。

現地を踏査したところ、既に古墳の立地する丘陵の先端部は土取りが行なわれていて崖状を呈しており、丘陵上には円墳状の高まりが確認された。繁茂していた下草を除去したところ隣接する956-1番地に前方部が延びる前方後円墳であることを確認した。

測量の結果は第21図のとおりである。後円部に比べて前方部が短く、クビレ部が細く絞まり、前方部が前面に向かって若干撥方に開いている。また、前方部はくびれ部から先端に向かって高さを増し、端部では基壇状に一段高くなっている状況が看取されるなど、墳形に著しく古式の様相がみられた。

一方、後円部頂上には盗掘によるとみられる大きな陥没坑が認められた。墳丘の形態、規模、盗掘による被害状況を確認し、将来に向けて保存措置を講ずる必要があるとして、県教育委員会と協議した結果、緊急の調査を実施することとした。

調査の結果、古墳時代前期前半代にさかのぼる古式の前方後円墳であることが明らかとなった。糸島の古墳時代の研究上貴重な古墳であるとして地権者の大江氏と協議した結果、土取り計画を変更し、古墳を現地に保存することで了承を得ることができた。

調査は昭和58年３月１日から３月15日までである。

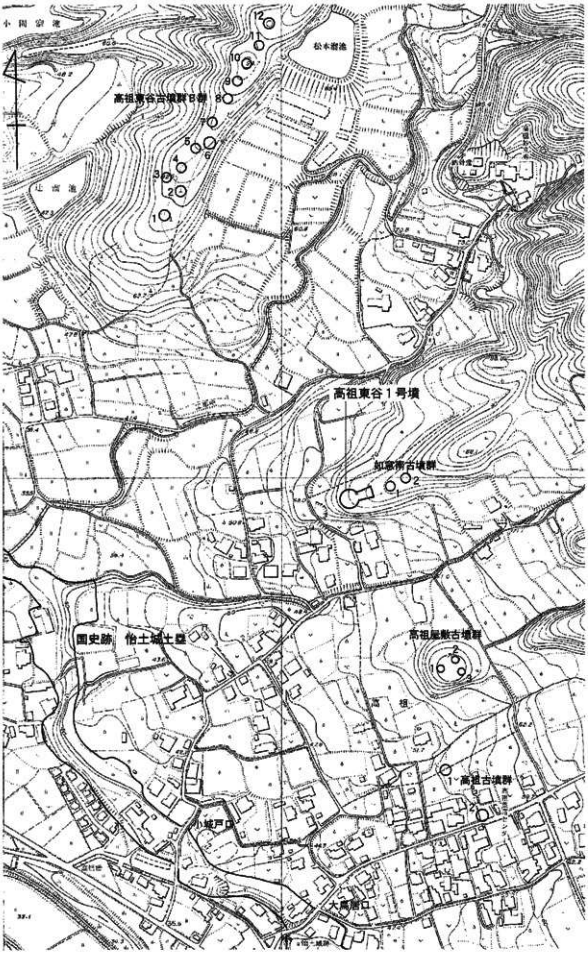
２．調査の組織

発掘調査は前原町教育委員会（現前原市教育委員会）が調査主体となり、川村博が調査を担当し、石井扶美子（現夜須町教育委員会）、中村昇平（現春日市教育委員会）らが補佐した。

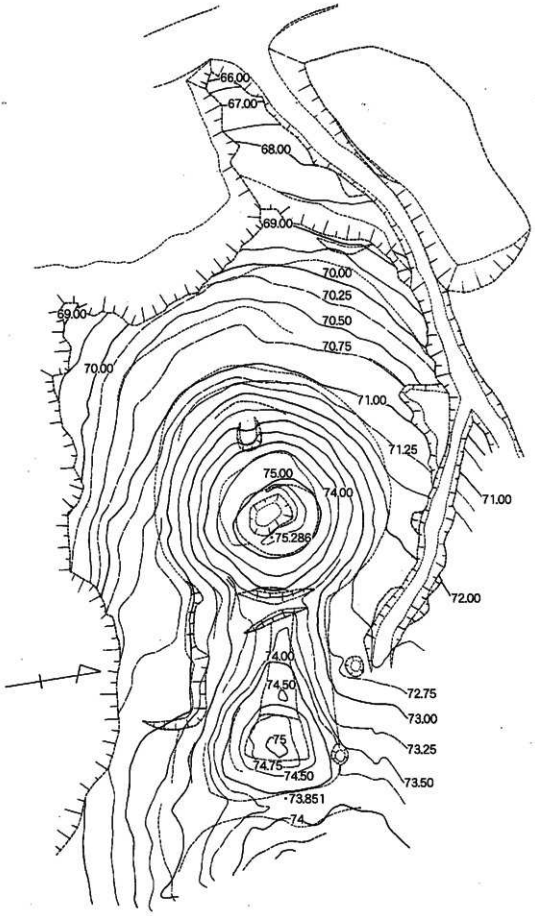
Ⅱ．調査の記録

１．位置と環境（第20図）

高祖東谷１号墳は高祖山の西斜面に派生する尾根の先端標高70mほどに所在する前方後円墳である。古墳頂上からは怡土平野を一望することができる格好の位置にある。

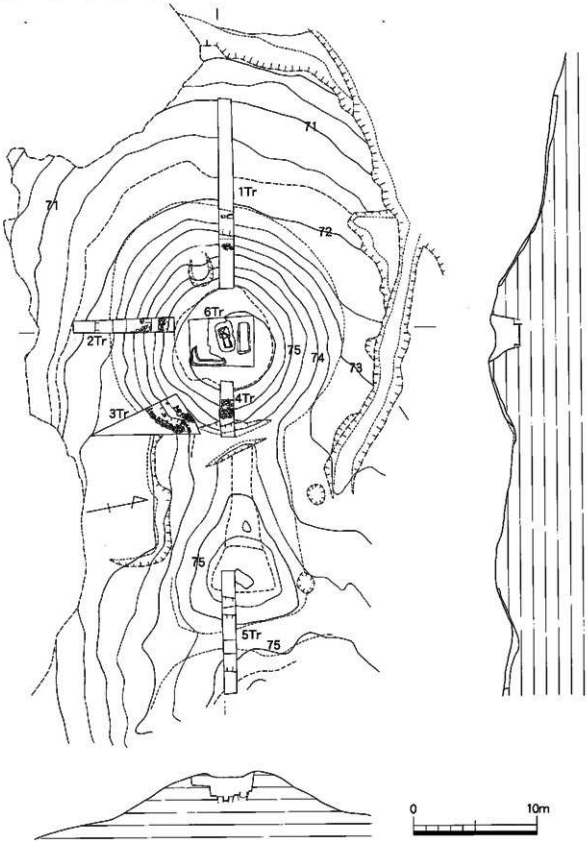


第20図　高祖東谷１号墳の位置と周辺の地形（1/2,500）



第21図　高祖東谷１号墳調査前現況図（1/300）

古墳は国史跡怡土城内に位置する。怡土城は天宝勝宝8（756）年6月から神護景雲2（768）年2月まで、約12年の歳月を要して築かれた。高祖山（標高417m）の西斜面に築かれており、推定



第22図　高祖東谷1号墳調査区配置図（1/300）

されている城域は南北1.9km、東西1.5km面積は2.7km²におよぶ。山裾に南北約1.9kmの土塁線を築き、北、南は高祖山から派生する急峻な尾根、東は険しい山肌を天然の城壁に見立てて城域を形成する。これまで南北に7箇所、西に2ヶ所の望楼が確認されており、土塁には数箇所の門跡推定地もある。

高祖山の西～南西斜面一帯では、山裾に向かって派生する尾根筋を中心に、計63基の古墳が確認されている。多くは椚、山犬ノ尾地区に集中する6～7世紀の後期群集墳であるが、近隣には箱式石棺を埋葬主体とする高祖屋敷古墳群や、高祖東谷B古墳群（5世紀～）も立地する（第20図）。

2．調査区の設定

調査は時間的制約もあり最低限にとどめるため、後円部南半部を中心に局部的に試掘トレンチを設定した。後円部では墳丘の推定主軸線に沿って西に1トレンチ、主軸に直交して南側に2トレンチ、クビレ部に3トレンチ、主軸上の前方部裾部に向かって設定したトレンチを4トレンチとした。

また、主体部の遺存状況を確認するために後円部頂上部に3.6×5.1mのトレンチを設定し6トレンチとした。

なお、前方部は今回、土取り対象地ではなかったことと時間的な制約から、墳丘規模などを確認するため、主軸に沿って前方部前面に5トレンチを設定するにとどめた。

3．墳　丘

古墳は高祖山西斜面に舌状に張り出した尾根の先端に位置する。墳丘の現況測量の結果、丘陵の先端を切断し地山の削り出しによって、前方部および後円部下段を整形し、後円部上段に盛土を施して築造されたものと推定される。今回の調査で後円部が3段築成であることが判明したが、墳丘の断ち割り等は行なっていないため、墳丘構造の詳細は将来の追加調査の成果に期したい。

以下、各トレンチの概要を述べる。

1トレンチ（第23図①）

後円部主軸上に配したトレンチである。墳丘1段目裾と2段目の裾部に葺石の残りが認められるが遺存状態は悪い。3段目の葺石は確認できなかった。1段目と2段目の間のテラスは辛うじて確認できたが、他の段築等の詳細は明らかでなかった。

2トレンチ（第23図②）

後円部主軸から地南に直交方向に配したトレンチである。1段目の葺石は失われているが、2、3段目の葺石とテラス面は確認することができた。しかし、2段目葺石は崩落が進んでおり、旧状はとどめていない。3段目葺石は腰石が比較的良好に遺存していた。

3トレンチ（第23図③）

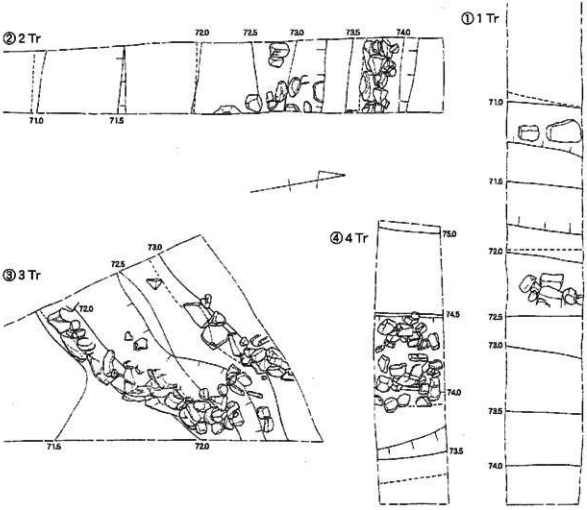
左クビレ部に設定したトレンチで立木等の制約を受け、三角形状のトレンチとなった。後円裾部をめぐる葺石列と2段目の葺石列、また、クビレの屈曲部もトレンチ端で辛うじて確認することができた。

1段目の葺石は墳丘基底部に大ぶりな花崗岩の角礫を配して裾石としている。石積みは粗く貼石状に急傾斜で積み上げている。1段目の高さは概ね50cmほどである。墳丘1段目と2段目の間にはテラスが幅40cm～50cmほどある。2段目の斜面にも葺石が葺かれていたことが確認された。

4トレンチ（第23図④）

後円主軸上でクビレ部との連接関係、3段目の葺石の状況を確認するために設定したトレンチである。葺石は斜面を滑落しかけた状態を呈し、遺存状態は悪い。

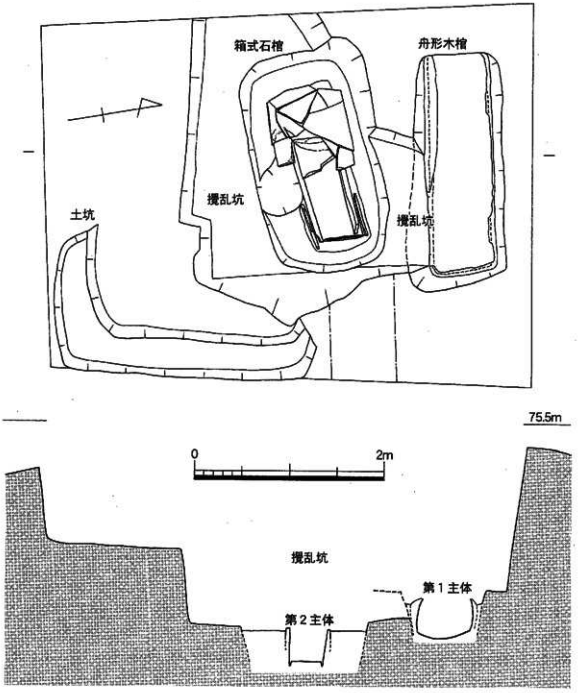
トレンチ下の南北に掘られた通路状の溝は土地の境界標示のために掘られたものであろう。



第23図　1～4トレンチ葺石出土状況図（1/60）

5トレンチ

前方部の主軸上に配したトレンチで、墳丘裾の確認と、葺石、段築の有無等を確認するために設定した。尾根筋を長さ6m、深さ約1mにわたって掘削切断して前方端を成形築造している。前方部頂上部は長さ4m、幅6m、高さ50cmほど隆起し、墓壇状を呈する。



第24図　5トレンチ遺構配置と断面図（1/40）

4．主体部

後円部頂上の大きく陥没した攪乱坑の真上に６トレンチを設定した。攪乱土を取り除き埋葬主体の検出を行なった。

まず、表土直下から南北方向に主軸をとる土坑が検出された。さらに掘り進めるとトレンチの北端から舟形木棺を被覆する粘土槨を検出した。攪乱はさらに中央に向かって深くなり、掘り進めると、トレンチのほぼ中央から箱式石棺を検出した。

盗掘は、箱式石棺の蓋材が舟形木棺の攪乱坑の底部に残されていたことから刳抜型木棺→箱式石棺の順に行なわれたことがわかる。

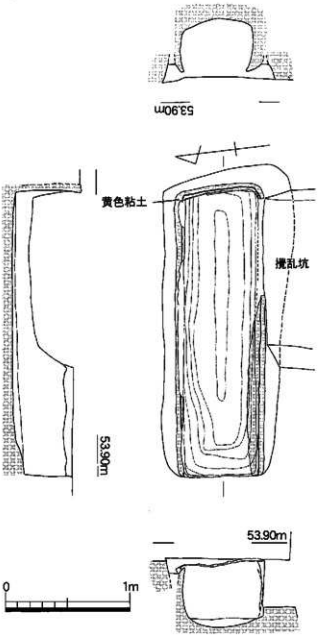
刳抜形木棺（第25図，図版11a、b）

トレンチの北辺下で検出した木棺である。盗掘時に棺の南東側面の１部が破壊されており，棺体は完全に腐朽していたが、棺を被覆していた黄色粘土によって棺の外形はほぼ把握できた。なお、棺の面小口では粘土による棺の被覆は行われていない。棺内床面には棺内に充填塗布されていたとみられる大量の赤色顔料が堆積していた。

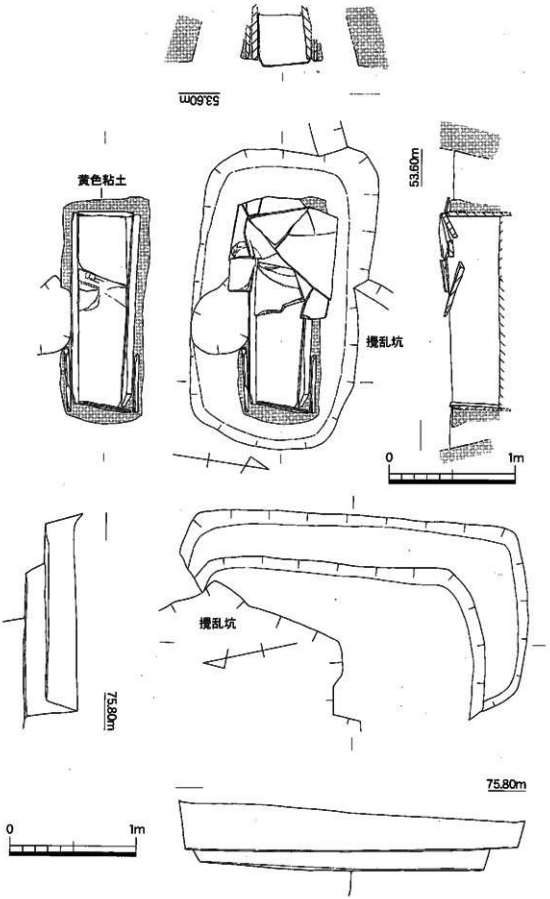
棺の外法は全長2.30m、幅は東端で63cm、西端付近で57cmを計る。天井部は崩落していて正確な棺の高さは不明であるが東小口付近では被覆粘土の上端が内側に向かって急にせり出していることからこれが蓋の上端にほぼ相当するものと推定されここでの高さは51cm程度と推定される。

ちなみに西端では小口部の高さは39cmを測る。断面形態をみてみると、縦断面は底面はやや舟底状に両端に丸みがあり東西両小口部とも若干外側に膨らみ気味に直立する。横断面は床面が下方に向かって膨らみ中央部では角張って、側面は外に膨らみながら立ちあがり、中ほどで　cmほどと最大幅となるものの、そこから上面に向かって若干すぼまる。

これから推定される棺の形態は長大で横断面が円形を呈する割竹形ではなく、棺底が舟底状を呈し、外側を箱形のよう成形した棺長の短い刳抜式木棺と推定される。なお、調査にあたって棺形の観察を重視し、被覆粘土と墓壙との関係を確認するための掘り下げ調査は行なっていないことから、墓



第25図　舟形木棺実測図（1/30）



第26図　箱式石棺（上）、土坑（下）実測図（1／30）

墳の形状、被覆粘土との関係、棺の固定方法など詳細は不明である。

棺は幅が東にやや広がっていることから、頭位は東にあったものと推定される。また、棺内からは、元位置を保った状態で副葬遺物は出土していない。盗掘坑廃土から赤色顔料にまみれた鉄刀、鉄剣、不明鉄器等が出土している。

箱式石棺（第26図，図版11ｃ、ｄ）

トレンチの中央で検出した。主軸をＮ96°Ｗに向けて構築された箱式石棺で、玄武岩の板石を組み合わせている。

小口に薄い板石を縦長に埋め込み、両側から側板で挟み込んでいる。側版は西側に切り口の整った面を揃えて据え、東端は面が整っていなかったために隙間が生じたことから、棺の外側に薄い板石を裏込めして、隙間を補強している。東北隅角は側版が短くて小口板を挟み込むことができなかったためか、裏込められた薄板で小口石を挟み込んでいる。

蓋は東半部が盗掘により破壊されていたが、西側では玄武岩の板石を幾重にか重ねて隙間を埋め、さらに黄色粘土で充填して棺を被覆してる状況が確認された。蓋の幅は広い所で0.8mにおよぶ。

棺の内法は床面で長さ1.50m、幅は西部で0.44m、東部で0.33mを計り、深さは西部で0.42m、東部で0.38mを測る。棺材の組合せが西に重点を置いていること、棺の幅も西側が広いことなどから被葬者の頭位は西向きであったと推定される。棺床には２枚の玄武岩の板石を敷いて棺床とする。西に小さな板石、東に長い板石を配しており、継ぎ目には隙間があかないように調整されている。

棺内には赤色顔料が塗布されていたが、材質の固定は行なっていない。また、棺内から元位置を保った副葬品は出土していない。

撹乱坑出土鉄器（第27図，図版12ｂ）

撹乱坑の廃土から９片の鉄器片が出土した。接合を試みたところ、完全には接合できなかったものの３個体分の鉄器であることがわかった。いずれも表面に赤色顔料の付着が顕著である。

１は大刀である。現存長65.6cmを計る。切先と茎尻部は欠失しており、中途で2箇所に接合できなかった個所がある。茎部と刃部の境には鈍角に段をなす関がある。Ｘ線透過撮影も行ったが茎部で目釘穴は確認できなかった。

2は小型の鉄剣片で、２片は接合しないが同一個体と推定される。残存長は17.6cm。刃部身の中央部に明瞭な稜を有す。刃部は関付近で幅2.7cm、厚さ５mmを測る。関は鈍角に刳り込まれている。

表面には木質は遺存していない。関付近に目の細かい布片が錆着しており、抜身状態で絹布で包んで副葬したものと推定される。

3は２個の断面長方形の薄い鉄器が横並びに錆着している資料で、互いに接合しないものの同一個体と推定される。器種は特定することができない。

詳細は不明である。

５．その他の遺構

土　坑（第26図下，図版12ａ）

トレンチの東端南東隅角で主軸をＮ13°Ｅにとり、残存長2.76cm、幅1.53m、深さ51cmの２段

に掘りこまれた隅丸長方形プランの土坑を検出した。遺構の東半部は盗掘により破壊されている。性格については不明であるが、墳頂からの掘り込みが浅く、古墳の埋葬主体とは考えられない。出土遺物はない。

Ⅲ. まとめ

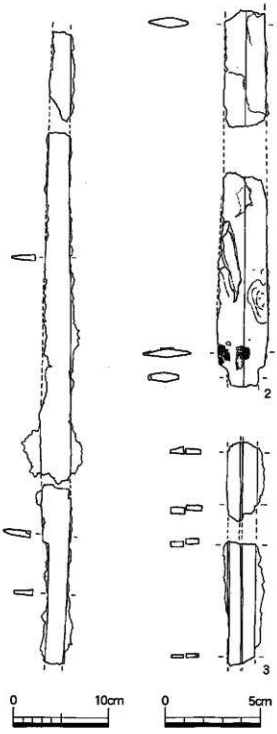
古墳の形態・規模　調査の結果、小型ながら前方部は２段、後円部は３段築成の前方後円墳であることが判明した。調査地点が十分でないため墳形形態の確定にはいたってないが、主軸は概ねN83°Wに向き、墳丘全長は35m、後円部径18.6m、高さ4.4m、前方部長16.5m、クビレ部幅８m、端部幅12m、高さ２mほどと推定される（第28図）。クビレ部は細くしまり、端部に向かって若干広がる古式の様相を呈する。前方分頂部が基段状を呈する点も注目される。

後円部の１～４トレンチでは葺石を確認できたが、前方部の５トレンチでは確認することができなかった。葺石は丘陵下からの外観を重視して後円部側のみに葺かれていた可能性が高い。葺石に使用された石は高祖山で産出する花崗岩の角礫を多用している。

なお、段築など、墳丘細部の詳細については今回の調査では明確にすることができなかった。将来の調査に期したい。

主体部　後円部頂上で墳丘の主軸方向に沿って埋葬された２基の主体部が確認された。舟形木棺と箱式石棺である。刳抜形木棺は近隣では福岡市の若八幡宮古墳で確認されている。一方箱式石棺は玄武岩の板石を用いており玄界灘沿岸の弥生時代終末、前期古墳の埋葬主体としてしばしばみられる。当該地方では、前原市の東五反田遺跡、本林崎古墳、御道具山２号墳、志摩町の権現古墳などでの使用が確認されている。

２基の主体部を比較してみる。まず埋葬の順序については、箱式石棺の墓壙北部を切って刳抜形木棺が掘り込まれている。主体部の後円部

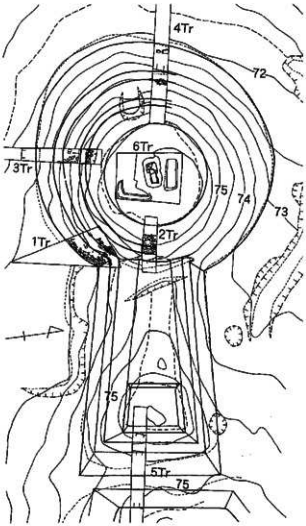


第27図　カクラン坑出土鉄器実測図（1/4、1/2）

における位置関係をみても、箱式石棺が後円部のほぼ中央に位置するのに対し、刳抜形木棺はやや主軸から北寄りにずれた位置に埋葬されており箱式石棺に位置取りの優越性が認められること、また、それぞれの棺の埋葬された深さが箱式石棺の棺底が墳頂から2.35mと深いのに対し、刳抜形木棺は2.0mの深さであり（第24図）、箱式石棺のほうがより深い位置に埋葬されていることなどからも追認することができる。これらの状況から、第２主体部が第１主体部に先行して埋葬されていることは明らかである。

双方の棺の規模を比較すると、箱式石棺の内法は2.28m（L）×0.62m（W）×0.54m（D）であるのに、刳抜形木棺は1.5m（L）×0.38m（W）×0.42mで、刳抜形木棺のほうが主体部の規模の比較では軍配が上がる。埋葬主体や、規模の差の要因については今後検討すべきと考える。

出土鉄器　撹乱土から出土した鉄刀、鉄剣、不明鉄器について、厳密にはどちらの主体部に副葬されたものか判断は難しい。しかし、刳抜形木棺の棺内から多量の赤色顔料が出土しており、遺物の表面に大量の赤色顔料が付着していたことと、箱式石棺棺内の撹乱が著しかったことなどから、副葬品は刳抜形木棺から出土した可能性がより高いと思われる。鉄剣は身幅が狭い短剣で、茎長も短い古式のものである。



第28図　高祖東谷１号墳墳形推定図（1/400）

古墳の築造時期　最後に古墳の築造時期について、墳丘形態は、古式の様相が読み取れ、後円部頂上から出土した主体部は在地色の強い箱形石棺と刳抜形木棺であったことから、現状では古墳時代の前期の古段階に位置づけうる。築造時期の推定に最も有効な土器の出土がないことから、時期の絞り込みは難しいが、糸島地方最古の定型化された前方後円墳と位置づける御道具山古墳と比べて、前方部長の墳丘に対する比率が高く、ほぼ後円径に近いことから、同墳より後出し、類似する刳抜形木棺を内部主体とする若八幡宮古墳に先行する前方後円墳集成編年の２期に相当するものと推定される。

図　版

a．井原１号墳全景（真上から、右が北）

b．１次調査１，２トレンチ全景（東から）

図版　2

a．2トレンチ3段目
（北から）

b．2トレンチ1，2段目
（東から）

c．3トレンチ（北から）

a．4トレンチ（南から）

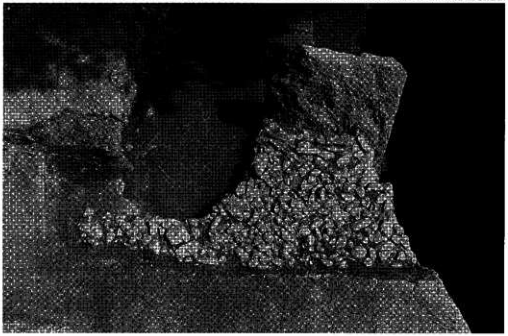
b．5トレンチ（北から）

c．6トレンチ（西から）

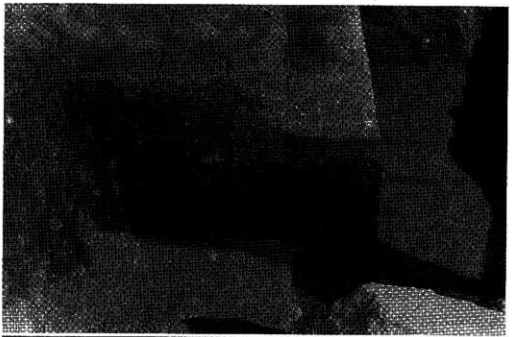
図版　4

a．後円部箱式石棺
（南から）

b．同上（東から）

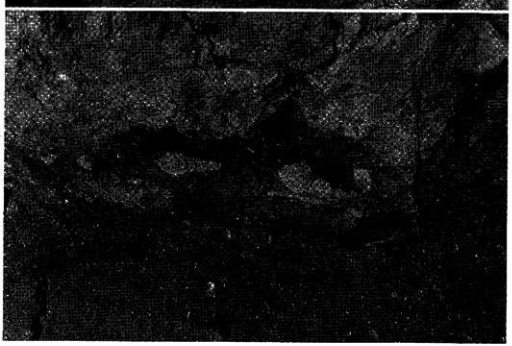


c．箱式石棺外鉄器群A
出土状況（北から）



a．サブトレンチa
箱式石棺堀り方東土層
断面（北から）

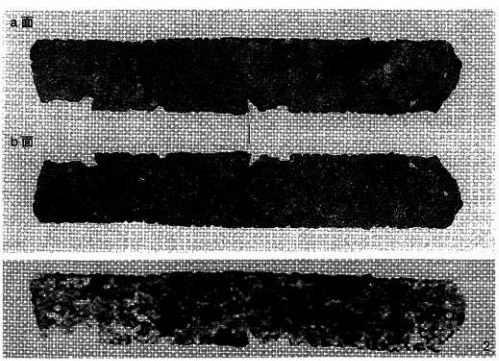
b．箱式石棺外鉄器群B
出土状況（西から）



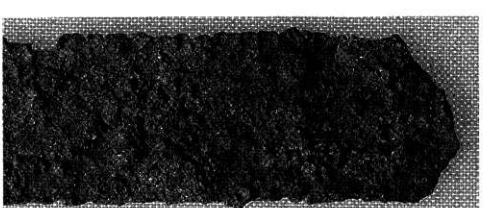
c．同上近景（西から）

a．箱式石棺棺材（北から）

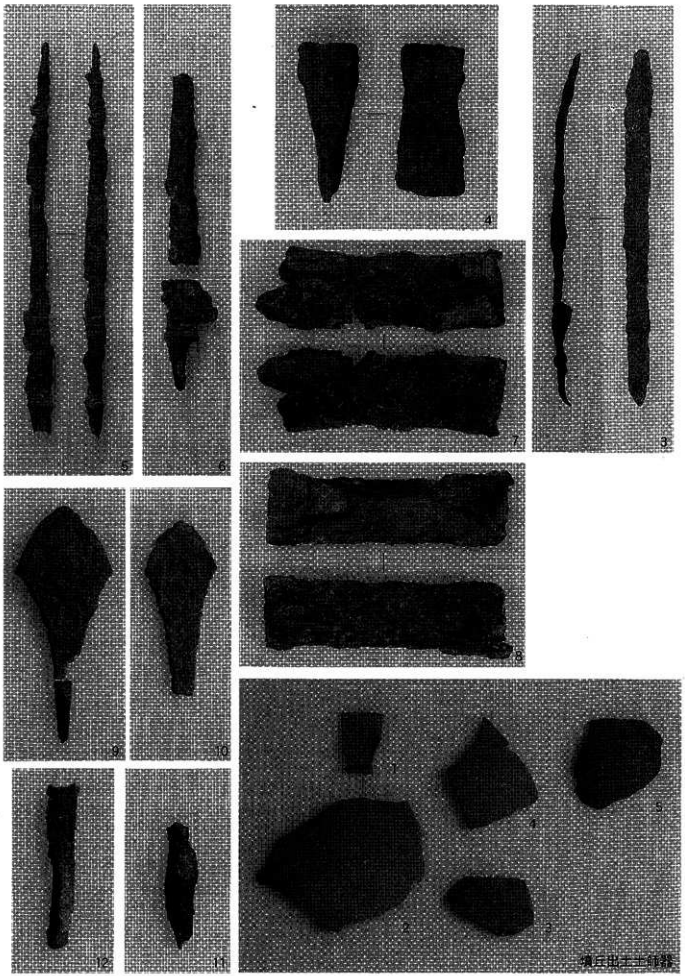
1



X線透過写真



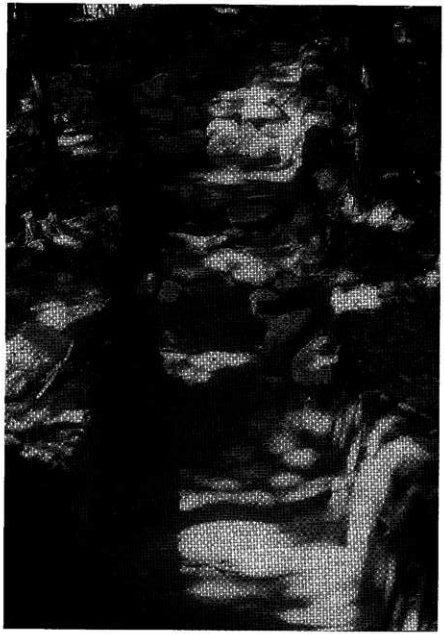
b．箱式石棺外出土鉄器①



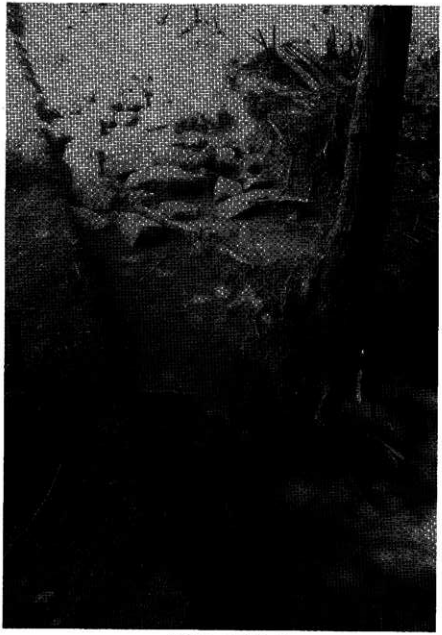
箱式石棺外出土鉄器②，墳丘出土土師器

a．高祖東谷１号墳調査前現況（北東から）

b．３トレンチ（南から）



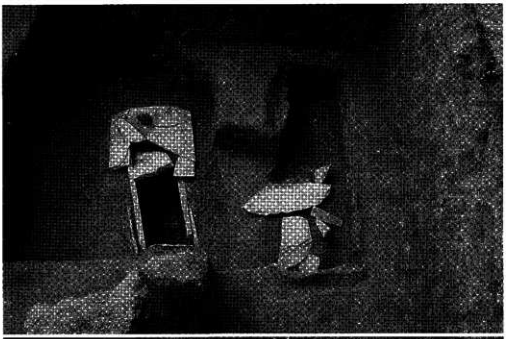
b．2トレンチ（南から）



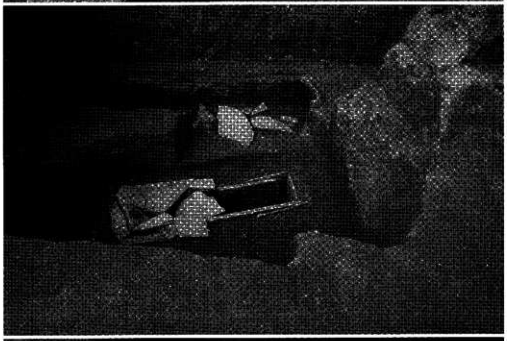
a．4トレンチ（東から）

図版 9

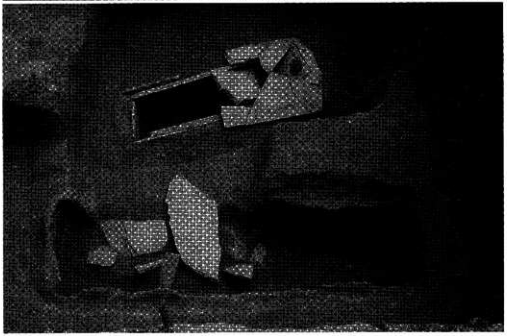
図版 10



a．後円部主体部検出状況
（東から）

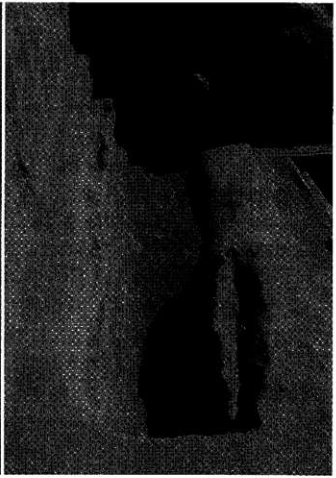


b．同上（南から）



c．同上（北から）

a．舟形木棺検出状況（東から）

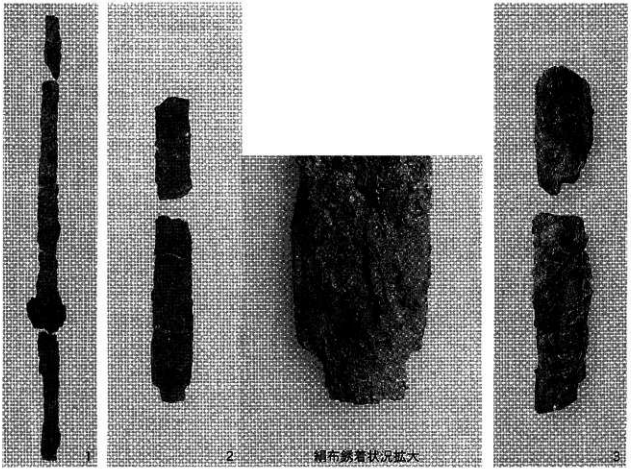


b．舟形木棺内部清掃後（西から）

c．箱式石棺検出状況（東から）

d．箱式石棺内部清掃後（西から）

a．後円部土坑完掘状況（北から）



b．出土鉄刀、鉄剣、不明鉄器

報告書抄録

フリガナ	イワラ1ゴウフン
書名	井原1号墳
副書名	前原市文化財調査報告書
巻次	第83集
編集者名	岡部裕俊
編集機関	前原市教育委員会
所在地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目8番14号 TEL (092) 323-1111
発行年月日	西暦2003（平成15）年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
イワラ1ゴウフン 井原1号墳	フクオカケンマエバルシ 福岡県前原市 オオアザイワラ 大字井原 アザキョウガノ 字京籠 541番地			33° 30′ 12~22″		平成14年3月 ~同年6月	50㎡	重要遺跡確認調査
タカスヒガシタニ 高祖東谷 1ゴウフン 1号墳	フクオカケンマエバルシ 福岡県前原市 オオアザタカス 大字高祖 アザヒガシタニ 字東谷 1656番地1 1658番地			33° 30′ 12~22″		昭和58年3月		緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井原1号墳	前方後円墳	縄文 古墳	墳丘、葺石、箱式石棺	縄文土器、石器、土師器、鉄器（剣、鏃、鋸、錐、鑿、斧）	大破した箱式石棺の棺外から副葬鉄器が出土
高祖東谷1号墳	前方後円墳	古墳	墳丘、葺石、箱式石棺、舟形木棺	鉄剣、鉄刀、不明鉄器	後円部頂上に2基の埋葬主体を設ける。

井原地区周辺の古墳群Ⅱ

井　原　１　号　墳

福岡県前原市大字井原字京龍所在前方後円墳の調査報告

前原市文化財調査報告書　第81集

2003年３月31日

発行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西１丁目８番14号
電話　０９２－３２３－１１１１㈹

印刷　前原相互印刷株式会社
福岡県前原市大字浦志２９４－５
電話　０９２－３２２－３４４５